

## 【派遣結果】（別紙）

### （1）世界自然遺産屋久島に関する調査

- ◆調査日時◆ 令和8年1月13日（火）午後3時30分～5時
- ◆調査場所◆ 鹿児島県庁（鹿児島県鹿児島市）
- ◆対応者◆ 鹿児島県環境林務部自然保護課 種子田 賢宏自然保護係長  
鹿児島県観光・文化スポーツ部PR観光課 宮田 幸男 課長補佐

#### ◆概要◆

##### ○調査の目的

鹿児島県に位置する屋久島は、豊かな自然と世界自然遺産という特性を活かし、持続可能な未来を目指した様々な取り組みを行っているため、屋久島における観光振興や、世界自然遺産とユネスコエコパークの登録に至った経緯及び持続可能な島づくりに係る環境保全や住民との共同によるまちづくりに関する鹿児島県の取り組みについて調査し、本県における世界自然遺産白神山地の新たな活性化や観光振興の参考とする。

##### ○調査先の状況

・「屋久島が世界自然遺産とユネスコエコパークの登録に至った経緯等について」

屋久島は、樹齢1,000年を超えるヤクスギの原生林や、コケなどの雨の多い気候に適応した植物が特異な景観を見せているクライテリア vii(自然美)と、日本列島の南に位置しているにもかかわらず、標高約2,000mの山岳を有し、ひとつの島の中で南北に長い日本の自然植生を見ることができるとともに、クライテリア ix(生態系)の2項目が評価され、1993年12月11日に、本県の白神山地とともに、日本で初めて世界自然遺産に登録された。

また、屋久島世界自然遺産地域の管理体制は、管理者である環境省、林野庁、文化庁、鹿児島県、屋久島町の他に、地元有識者、観光協会やガイド部会等の関係団体で構成する地域連絡会議や、専門家から構成される科学委員会が設けられており、この3つの組織で連携をはかりながら屋久島の管理をしている。その他、ガイド制度をはじめ、エコツアーリズム推進法に関する制度等に関する総合的な検討の場として屋久島町エコツアーリズム推進協議会や、マイカー規制や協力金制度の運用、山岳トイレ問題等の山岳利用の統合的な検討・合意形成の場として屋久島山岳部保全利用協議会がある。

世界自然遺産登録後、入山者が増加し、ピーク時は年間40万人の入込客数により、登山口の車両混雑、登山道沿いの植生荒廃、山岳部のトイレのし尿処理など、利用集中による体験の質の低下などの課題が発生したため、車両の乗り入れ規制(3月～11月)や登山道の木道整備、屋久島の山岳環境の保全・整備に向けた山岳部利用者からの協力金徴収や、屋久島公認ガイド認定制度などの対策を講じてきたが、登山道・避難小屋等の維持管理の予算・体制の確保と、山岳部のトイレのし尿処理の予算・技術の確保等の課題が残っている。

主要課題の一つである屋久島の山岳部中心の利用者の分散化に向け、自然環境に負荷を与えない屋久島の里地の暮らしや伝統文化を体験できるエコツアー(歴史・文化・郷土料理など)の取り組みも新たに進めている。

また、ヤクシカによる被害(生態系・農林業)についても課題としてあり、ヤクシカの増加による自然植生の荒廃やポンカン等の果樹被害があるため、第二種特定鳥獣(ヤクシカ)管理計画に基づき、適正な個体数管理をしている。

屋久島環境文化村構想は、屋久島の素晴らしい自然を守りながら、島に暮らす人々の生活を豊かにしていこうという考え方で、国際的にも学術的評価の高い屋久島の自然環境と自然を損なうことなく何千年にもわたって積み重ねられてきた屋久島特有の生活文化(環境文化)を戦略的イメージとして掲げ、学習や研究によってその価値を見直すことを通して、屋久島の自然環境の保全を図るとともに、自然と人とが共生する屋久島ならではの個性的な地域づくりの試みである。

この構想を実践する組織として、1993年に屋久島環境文化財団を設立し、環境学習、環境形成、ネットワーク形成、屋久島地域づくり推進、国際交流の5つの柱による各種事業を実施している。また、環境文化村構想を推進する中核施設として、屋久島環境文化村センターと屋久島環境文化研修センターを1996年に設置した。

世界自然遺産では評価されていない水環境の保全や自然と関わっている文化などを活かした地域づくりを推進していくため、ユネスコエコパークの拡張登録を目指し、2016年に屋久島・口永良部島全体が拡張登録された。

・「世界自然遺産を活かした観光振興について」

鹿児島県には、3つの世界遺産「屋久島」「明治日本の産業革命遺産」「奄美大島・徳之島・沖縄島北部及び西表島」があり、2つの世界自然遺産を有しているのは、国内では鹿児島県のみである。

また、鹿児島県産肉用牛飼育数が全国1位、養殖ブリの生産量が全国1位、うなぎ生産量が全国1位、その他、荒茶生産量が全国1位、かごしま黒豚飼育数が全国1位など、世界に誇れる多彩な食の県である。

更に、温泉地は約100か所あり、源泉数は全国2位、焼酎の蔵元数は110か所で全国1位を誇っている。

陸と空のインフラとして、特に空のインフラはアジア諸国に地理的に近いこともあり、九州の南の玄関口として、ソウル・上海・台北・香港、東アジア主要4都市間路線が開設されており、国内においても、羽田空港－鹿児島が1日に23便就航している。一方で、昨年の秋頃から香港線は運休し、上海線は欠航中である。

宿泊者数については、コロナ禍で減少したものの、現在はコロナ禍前までの水準に回復し、2024年は837万人まで回復したが、インバウンド需要については、コロナ禍前までには回復していない。

海外の空の直行便市場としては、韓国、中国、香港、台湾がメインとなっている。韓国は週に21便あり、冬場のゴルフ需要もあり、他国に比べ多い。

観光立県かごしま県民条例を2009年に制定し、鹿児島県観光振興基本方針を2025年に定め、観光の稼ぐ力の向上、宿泊者数を増やす、クルーズ船による観光客を増やす、観光客の満足度を高めリピーターを増やすの各視点において数値目標を掲げ、観光立県かごしまの実現に向けて取り組みを進めている。

屋久島・奄美大島・徳之島の観光動向については、屋久島は世界自然遺産登録後、2008年をピークに減少し続けている。また、屋久島は、雪の影響もあり降雪時の12月から2月は入込客数が減るのが課題である。

そのため、世界自然遺産を活かした観光振興施策として、屋久島の歴史と文化の魅力発信事業や、屋久島空港滑走路延伸を見据えた観光振興に係るWG(プロペラ機からジェット機への検討など)、サイクリングロード整備事業、国際クルーズ船誘致促進事業を展開し強化を図っている。

#### ○調査結果を本県政に活かすための展望

本県には、世界自然遺産の白神山地、世界文化遺産の三内丸山遺跡をはじめとした北海道・北東北の縄文遺跡群がある。特に、屋久島と同時に世界自然遺産に登録された白神山地と屋久島を比べると、屋久島は観光振興に役立てており、自治体のみならず各関係団体や地元住民からの協力体制を構築している。

屋久島では、厳格な保護ゾーンや利用を前提としたエリア(登山・エコツアー)を明確に分け、自然の価値を損なわずに人を迎える仕組みを構築しており、白神山地においても、周辺地域で学び・体験・地域経済を生むというゾーニングの再整理が鍵となるのではないかと感じる。

また、屋久島では、認定ガイド制度や地元出身ガイドの活躍により、自然の価値が体験として伝えられていることから、白神山地においても、ブナ林・生態系・マタギ文化・治水水源の価値を語れる白神山地ガイドの育成が必要だと感じる。

特に、屋久島では宿泊業、ガイド業、環境教育が雇用として根付いていることから、本県においても若者の地元定着、移住・関係人口の創出につながる「白神山地」となるよう戦略の確立に活かしていきたい。



## (2) 屋久島環境文化村構想の取り組みに関する調査

◆調査日時◆ 令和8年1月14日(水) 午前12時30分～午後1時30分

◆調査場所◆ 屋久島環境文化村センター(鹿児島県熊毛郡屋久島町)

◆対応者◆ 屋久島環境文化財団 屋久島環境文化村センター  
・蒲地 祥吾事務局長 ・田島 満事務局次長 ・濱崎 寿仁事業課長

### ◆概要◆

#### ○調査の目的

屋久島環境文化村構想は、国際的にも学術的評価の高い屋久島の自然環境を保護しつつ、何千年にもわたって積み重ねてきた屋久島特有の生活文化を戦略的イメージとして掲げ、屋久島の自然環境の保全を図るとともに、自然と人が共生する屋久島ならではの個性的な地域づくりに取り組んでいる。構想の理念と背景、推進体制と拠点施設、地域づくりの戦略について調査し、本県における白神山地に係る課題解決の参考とし、加えて、下北ジオパークのユネスコ世界ジオパーク認定に向けた取り組みに活かす。

#### ○調査先の状況

屋久島文化村センター施設内にある、展示施設で屋久島の歴史や世界遺産登録に至る経緯の説明を受け、オーロラビジョンの映像による世界遺産屋久島の概要について視聴後、財団担当者から構想の説明を受けた。

#### ○説明内容

・屋久島には、屋久杉をはじめとする貴重な自然だけでなく、自然を大切にしながら暮らしてきた人々の知恵や文化があり、こうした自然と人とのかかわりを「環境文化」と呼び、屋久島ならではの大切な財産として未来につないでいこうとしている。一方で、屋久島は大きな離島であることや山が多い地形のため、産業や雇用が限られ、若者や人が島を離れてしまうことや、観光客の増加による自然への負担、ごみや水の問題など、さまざまな課題を抱えている。

・観光に対する方針は環境文化に基づく新たな観光の創造を目指し、自然を保護しつつ利用して頂くために、特定の地域への過度の集中を避け分散を図りながら、量的な拡大より、利用の質的転換を促すような多様なふれあいの場を整備し、自然と共に生きる社会を取り戻しながら、観光や学び、情報発信を通して島の外ともよい関係を築くことができるように進めている。

#### ○調査結果を本県政に活かすための展望

屋久島では、森や川でのアクティビティが観光の大きな魅力の一つとなっていて、青森県でも屋久島のような「五感をフル活用する」自然体験プログラムを開発することで、地域の魅力を再発見し、子どもから大人までが学びを深めることができると考える。特に屋久島の子育て世代向け支援制度で提供されているような「自然を生かした保育」を青森県に導入する施策について研究していきたい。



### (3) 屋久島世界遺産センターの役割や施設の特徴に関する調査

- ◆調査日時◆ 令和8年1月14日(水) 午後2時~3時30分
- ◆調査場所◆ 屋久島世界遺産センター(鹿児島県熊毛郡屋久島町)
- ◆対応者◆ 環境省 屋久島自然保護官事務所 竹中 康進自然保護官
- ◆概要◆

#### ○調査の目的

屋久島世界遺産センターは、1993年12月に屋久島が世界自然遺産に登録されたことをきっかけに、環境省によって整備された施設で、1996年4月に開館し、2014年5月にリニューアルされている。センターの主な役割である普及啓発の推進、調査研究の拠点、国立公園の管理運営について及び施設の特徴を調査し、本県にある白神山地ビジターセンターの認知度と利用向上に向けた取り組みと展示内容への理解促進に向けた取り組みについての提案に活かす。

#### ○調査先の状況

##### ・屋久島の自然とその魅力

屋久島は、1993年に世界自然遺産に登録された日本を代表する島である。島の大半は山地で、九州地方で最高峰の宮之浦岳を中心に、樹齢数千年の屋久杉の原生林が広がっている。また、日本で最も雨が降る地域であり、年間降水量は山地で8,000~10,000ミリメートルに達する。この豊富な雨が屋久島ならではの豊かな生態系を形成している。

また、屋久島では自然と共生する暮らしに惹かれ、年間約250人の移住者がいるなど、人の流れも生まれている。

##### ・屋久島が世界自然遺産となった理由

屋久島が世界自然遺産として評価された理由の一つは、日本の南に位置する小さな島でありながら、亜熱帯から冷温帯まで、日本の主要な気候帯がひとつの島に凝縮されている点にある。こうした多様な気候環境のもと、原生的な森林が良好な状態で保たれ、ヤクシカやヤクシマザルなど固有亜種も生息し、国立公園指定に加え、森林生態系保護地域や原生自然環境保全地域など、重層的な保全体制が整備されていることが、「顕著で普遍的な価値」・「完全性」・「保全体制」という3要件を満たすものとして評価され、世界自然遺産登録につながった。

##### ・屋久島の課題と解決のための取組

屋久島では現在、年間約25万人の入込数があり、近年はインバウンドの増加も見られる。将来的には屋久島空港の滑走路延伸により、利用者がさらに増加する可能性がある。一方で、自然環境を支える現場では様々な課題が表面化している。島内ではヤクシカやヤクシマザルが身近に生息しており、餌付け防止を含めた利用ルールやマナーの徹底が重要となっている。また、インバウンドの増加を踏まえ、外国人観光客へのルール周知やゴミ問題への対応も課題である。視察を通じて特に印象に残ったのが、山岳部におけるし尿処理の問題である。山岳部は一部を除いて電気が通じておらず、トイレは汲み取り式などが中心で、し尿は容器に入れて人力で搬出されている。実際に水の入った模擬容器を持たせてもらったが、重量があるうえ液体が動くためバランスを取るのが難しく、これを傾斜のある山道で何キロも運ぶ作業は非常に過酷であると感じた。こうした作業は、山岳ガイドなどが担っているが、担い手不足の課題は大きく、継続的な体制の確保が課題となっている。これらの課題を受け、行政、関係団体、ガイド事業者等で構成する専門部会が設置され、山岳部における今後のし尿処理のあり方について検討が進められ、2025年3月に、トイレの利用ルールの周知徹底に加え、新たなし尿処理技術の導入や、ヘリコプター・ドローンを活用した、し尿処理の搬出方法など一定の方向性が取りまとめられた。

## ○調査結果を本県政に活かすための展望

今回の調査を通じ、世界自然遺産は登録で終わるものではなく、多くの関係者の継続的な取組によって、その価値が支えられていることを強く実感した。屋久島と白神山地は、降水量や地形など自然条件に違いはあるものの、原始的な森林景観や唯一無二の自然美といった点で共通点が多く、いずれも保全と利用のバランスが重要であると考え。屋久島における観光や登山者の増加に伴う課題や、現場を支える体制づくりの取組を参考に、青森県・秋田県の両県にまたがる白神山地においても、保全と利用のバランスを踏まえた観光などの在り方を検討し、その価値を持続的に次世代へ継承していきたい。



#### (4) ヤクスギランド及び紀元杉等の現地調査

◆調査日時◆ 令和8年1月14日(水) 午後4時30分～5時

◆調査場所◆ 屋久島レクリエーションの森保護管理協会(鹿児島県熊毛郡屋久島町)

◆概要◆

○調査の目的

世界自然遺産屋久島における密猟や無許可入山、鳥獣による生態系への影響、維持管理費について現地調査し、本県の白神山地における環境保全の課題解決に活かす。

○調査先の状況

屋久島レクリエーションの森保護管理協会は、屋久島の自然環境を保護し、管理するための団体である。同協会は、白谷雲水峡やヤクスギランドなどのレクリエーションの森を管理し、環境保全や教育活動を行っている。具体的には、携帯トイレの利用推進や、自然観察の促進、地域の環境教育活動を通じて持続可能な利用を進めている。

ヤクスギランドは、屋久島の標高約1,000メートルに位置する自然休養林で、屋久杉の巨木を間近で観察できるスポットである。樹齢数千年を超える屋久杉が立ち並び、初心者から上級者まで楽しめる5つの散策コースが整備されている。特に、30分・50分コースは遊歩道が整備されており、スニーカーでも楽しめる気軽さが魅力である。150分・210分コースは本格的なトレッキングルートとして用意されており、屋久島らしい原生林の森を体感できるとのことである。

「ヤクスギランド」からおよそ車で15分、標高約1,200メートルの安房林道沿いにある「紀元杉」の現地調査を行った。樹高19.5メートル、胸高周囲8.1メートル、推定樹齢3,000年といわれている紀元杉は、遊歩道が整備され一周して間近で調査することができ、斜面下側から見ると力強い樹勢を感じさせてくれた。ヤクシマシヤクナゲ、ナナカマドなど約12種類の着生樹があり、樹上に育っているとは思えないほどの大きさに育っている。

○調査結果を本県政に活かすための展望

トレッキングルートの設定や、遊歩道の整備、看板表示など、本県の白神山地の環境整備の参考としたい。

